

## 趣旨説明：聖職者と女性の歴史学

小 野 賢 一

この研究報告書は、愛知大学人文社会学研究所主催で開催された三つの講演会、すなわち2016年11月26日開催の「国境を超える歴史学」、2017年11月25日開催の「帝国と魔女で読み解くヨーロッパ」、2018年10月13日（土）開催の「ヨーロッパ前近代の複合国家」という三つの企画の問題意識を継承しつつ、2019年2月23日（土）に開催された「聖職者と女性の歴史学」の研究成果をまとめたものである。「聖職者と女性」というキーワードを通じて、近代歴史学のナショナル・ヒストリーを乗り越え、21世紀にふさわしい新しい歴史学のあり方について考えたい。とりわけ、「国家と教会」の枠組みから疎外されたディアスポラや女性といったマージナルな存在に目を向け、国制史・教会史を再検討することが今回の課題である。

西ヨーロッパのカトリックやプロテスタントと匹敵する巨大な宗教圏を、東ヨーロッパ、ロシア、オリエントで形成するのが、東方正教である。東方正教について世間一般では如何なるイメージが流布しているだろうか。近世（16世紀）に、ルターらの主導する宗教改革が起こった。宗教改革によって、カトリックの修道院の労働倫理は、プロテスタントの召命（天職）の理念へと発展させられ、その結果として資本主義社会が発展することとなったと説明されることが多い。この説明は、賛否両論を含みつつ、歴史学のみならず、経済学の分野にも多大な影響を与え、キリスト教の対立といえば、カトリックとプロテスタントの対立が一般に想起される。そのうえ、近代歴史学は、フランス、イギリス、ドイツなどの西ヨーロッパ諸国の歴史を中心に叙述される傾向があり、宗教に関しても、これらの近代国民国家で広まったカトリックやプロテスタントに関する記述が圧倒的に多い。

だが、現代のEU圏をはるかに超えたグローバルな地理的空間を二分し、ニケーアや

カルケドンなどの公会議の開催地が示す通り、三位一体などのキリスト教の核心的な教義の形成論争の中心地が多く含まれていたのは東方の教会であった。

東西の教会の分裂は中世に決定的となる。1054年にフィリオクエ問題の対立や政治状況によって、西方の教会は「普遍、カトリック」を掲げ、東方の教会は「正統、オーソドックス」を掲げて、相互に破門状を突き付けあって批判した。その結果、ローマ帝国時代の西方の教会は、ローマ教会を中心とするカトリック教会を形成し、ローマ帝国時代の東方の教会は、コンスタンティノーブル教会を中心とする東方正教会を形成した。そしてこの分裂が今も続いているのである。

1453年にビザンツ(東ローマ)帝国は滅亡し、その首都コンスタンティノーブルはイスラム教のオスマン帝国の支配下に入る。東方正教会は、スルタンによって、ミット制の下で存続を許された。古代以来の伝統で名目的にコンスタンティノーブル総主教はかろうじて権威を保った。ルネサンス期には依然として東方正教会の優れた学知はカトリック世界に尊敬の念を抱かせるものであったが、近代に入ると、西ヨーロッパ世界の優越感に端を発するオリエンタリズムのまなざしにさらされるようになる。

ビザンツ(東ローマ)帝国の滅亡後、ツァーリの保護下にあったモスクワのロシア正教会の影響力が増大し、モスクワは、第三のローマと見做されるようになった。この後、20世紀初頭にロシア革命が起こる。そしてロシア正教は、ソ連のなかに留まるグループと亡命教会を形成するグループに分裂する。社会主義体制のなかで迫害された教会は、さらに国外に離散したグループを周縁に迫いやることとなる。そこには国家と教会という単純な図式では説明しえない複雑な問題があるが、その実態が十分に知られているとは言い難い。幸いなことに、この分野の専門家の東海大学の近藤喜重郎先生を当研究所にお招きすることができた。ロシア革命後の亡命教会の歴史について、近藤先生にご教示いただくこととしたい。

近代国民国家の成立以前、そして以後も教会史のなかでは、俗人（一般信徒）や女性は控えめに断片的にしか姿を見せない。高校世界史の教科書を紐解くと、古代教会にお

いて各地の教会で活躍したとされるのは、十二使徒の後継者をはじめ、そのほとんどが男性聖職者であった。中世ヨーロッパ世界で活躍したのも、ローマ教皇をはじめとする男性聖職者であった。なかには、世俗の最高権力者たる神聖ローマ皇帝を一時的とはいえ、跪かせるほどの華々しいエピソードを持つ男性聖職者も登場する。教科書に限らず、伝統的に中世教会史は、グレゴリウス改革者（グレゴリアン）と呼ばれる一群のエリート聖職者の事蹟を中心に叙述される傾向が見受けられる。俗人（一般信徒）も女性もわずかしき登場せず、教会制度の周縁の扱いである。

制度については、これくらいにして、人と人のつながりの観点から俗人（一般信徒）の宗教心性（霊性）について考えてみたい。多くの西洋人は、何故パンとワインの食事を好むのだろうか。それは、単なる生活習慣以上のものである。日本では、パンとワインのディナーは、クリスマスのイベントと分かちがたく結びついている。フランスではどうだろうか。筆者は、クリスマスのパリの地下鉄の構内でホームレスがパンとワインの食事を摂っていたのを目撃したことがある。聖なる貧者＝キリストのイメージを想起した。

パンとワインの食事、特に人々の会食は、西洋人の社交と結社のメンタリティーの中核であるといってもよいくらいである。イエスは十字架に架けられる前に使徒（弟子たち）を集めて最後の晩餐を行った。そのときにイエスが行ったのが、パンとワインの儀式であった。この最後の晩餐は、現在も教会で行われているミサ（聖餐式）の中心儀式的聖体拝領の起源である。パンはイエス・キリストの聖なる身体、ワインはイエス・キリストの聖なる血を意味する。イタリア・ルネサンス期の天才レオナルド・ダ・ヴィンチが想像力を駆使して描き出したのは、イエスと使徒たちのこの最後の晩餐の光景である。

この儀式に俗人や女性が積極的に参入できるようになるのは、中世後期（13世紀以降）を待たねばならない。この儀式への彼らの積極的な参入は、教会制度の周縁に置かれた俗人や女性が聖職者とともに宗教的コミュニケーションに積極的に参入できる状況が都市空間において成立したことを意味する。都市史では、これまでギルドの成員の経済的な階級闘争について十分に論じられてきた。その一方で、宗教心性についての「階級闘

争」（これはコミュニケーションであって、階級闘争と呼ぶことは適切でないかもしれないが。）については、十分に論じられていない。つまり「モノ」についての研究蓄積に比して、「ココロ」についての研究蓄積はあまりにも少なかったといつてよい。

当研究所が今回お招きした藤女子大学キリスト教文化研究所の上條敏子先生は、中世教会史、女性史、そして社会史の専門家であり、ベギンと呼ばれる女性の活動の研究を通じて、宗教心性についていち早く本格的な研究に着手された。教会制度の周縁に追いやられた女性の心性に対する強い関心は、国制史や社会経済史が主流の学会の状況に異議を唱え、社会史研究の重要性を説かれた故阿部謹也先生のもとで上條先生が研鑽を積まれたことと無関係ではないだろう。社会史には「モノ」ではなく「ココロ」を読み解く心性史というアプローチ法があり、今回のこのワークショップで先生は、ヨーロッパ中世の女性の「ココロ」を読み解く手ほどきをしてくださるに違いない。本ワークショップは、周縁に追いやられた人々の宗教心性（霊性）の解明を通じて、21世紀にふさわしい新しい歴史学を実践する試みである。